

富士みち -信仰と芸術の文化記憶装置-

八代研究室
01512074 五味 彼方

1. 背景

富士みちとは富士山への信仰である富士講の道者たちが富士山山頂を目指し歩いた登拝への道である。しかし富士講の衰退、時代の変化とともに文化の中心地としての記憶は失われつつある。

そこで本計画では、土地固有の記憶やカタチとの対話を通じて、富士山と共にある街としての文化記憶装置となるインスタレーションの提案を行う。

2. 計画地

本計画では、富士山の北北東部、山梨県富士吉田市中央部に位置する富士みちの終着点、金鳥居手前の約 200m（海拔 793m～801m）の傾斜地、及び富士みちに隣接する衰退した商店街を計画地とする。

3. 設計要素①～⑤と設計フロー（図 1）

占有された空間同士の間にも生まれる隙間を埋めることで、活動の場を広げる。その際に、視線、動線をせき止める垂直形態を避け、土地の形態である斜めの形を置くことで、視覚と運動による非日常の感覚世界を生む（①統合）。市のシンボルである富士山の形態を取り入れることで新たな形態を獲得する（②象徴）。富士山と金鳥居から軸を取り、道路沿い以外の整列を行う（③整列）。富士山の形成の記憶から、最小限の起伏を残し飽和した状態を解消する（④起伏）。陰と陽の眺望特性から、地上と地下における2つの空間性を持たせる（⑤対極）。以上の5要素を取り入れ、土地的要素を持った記憶装置を設計する。

4. インスタレーションの構成と機能（図 2）

構成装置として、地下に①、地下に②～⑤の計5つの装置を提案する。また、それらを繋ぐ Monument、道、演出全体で1つのインスタレーションを構成する。下記に装置①～⑤の機能を示す。図2において全体構成及び詳細計画を示す。

①地下道 信仰の一部分であった富士みちの役割を示す遊歩道。側面にディスプレイウインドウを設け、歩きながら富士山と富士みちの記憶を辿る。

②近代美術館 回廊式の展示空間とし、芸術の記憶である富士山が描かれた浮世絵、富嶽三十六景を巡る。展示空間を登頂すると、365日表情を変える富士山眺望の演出空間へと移り変わる。

③現代美術館 現代の様々な手法で表現された富士山を回廊式の展示空間を通じて体感する。

④茶屋 テイクアウトが基本となるよう店舗スペースは最小限に収め、各自の拠り所を与える。

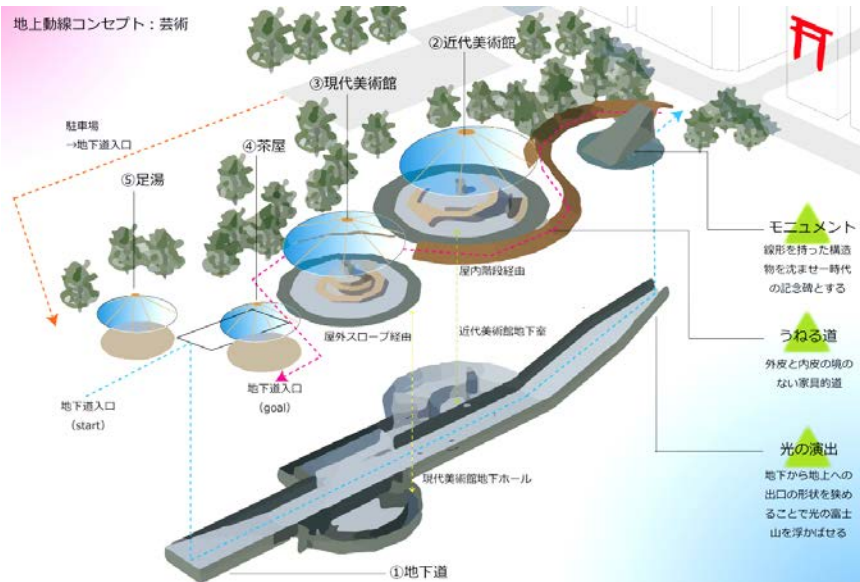
⑤足湯 徒歩が基本となる本計画において、来訪者へ休息の場を提供する。疲れを癒すだけでなく、地域を繋ぐコミュニケーションの場となる。

5. まとめ

富士は不死とも呼称され、日本の象徴として半永久的にあり続ける。富士山と共にある街として、土地の記憶を抽出し、富士山と街が持つ信仰と芸術の記憶を一つの環境として構築することで、空間を通して記憶を体験させ、未来に残り続ける新しい街の在り方を提案した。



図 1. 設計要素①-⑤と設計フロー



動線ダイアグラム

地下動線コンセプト：信仰

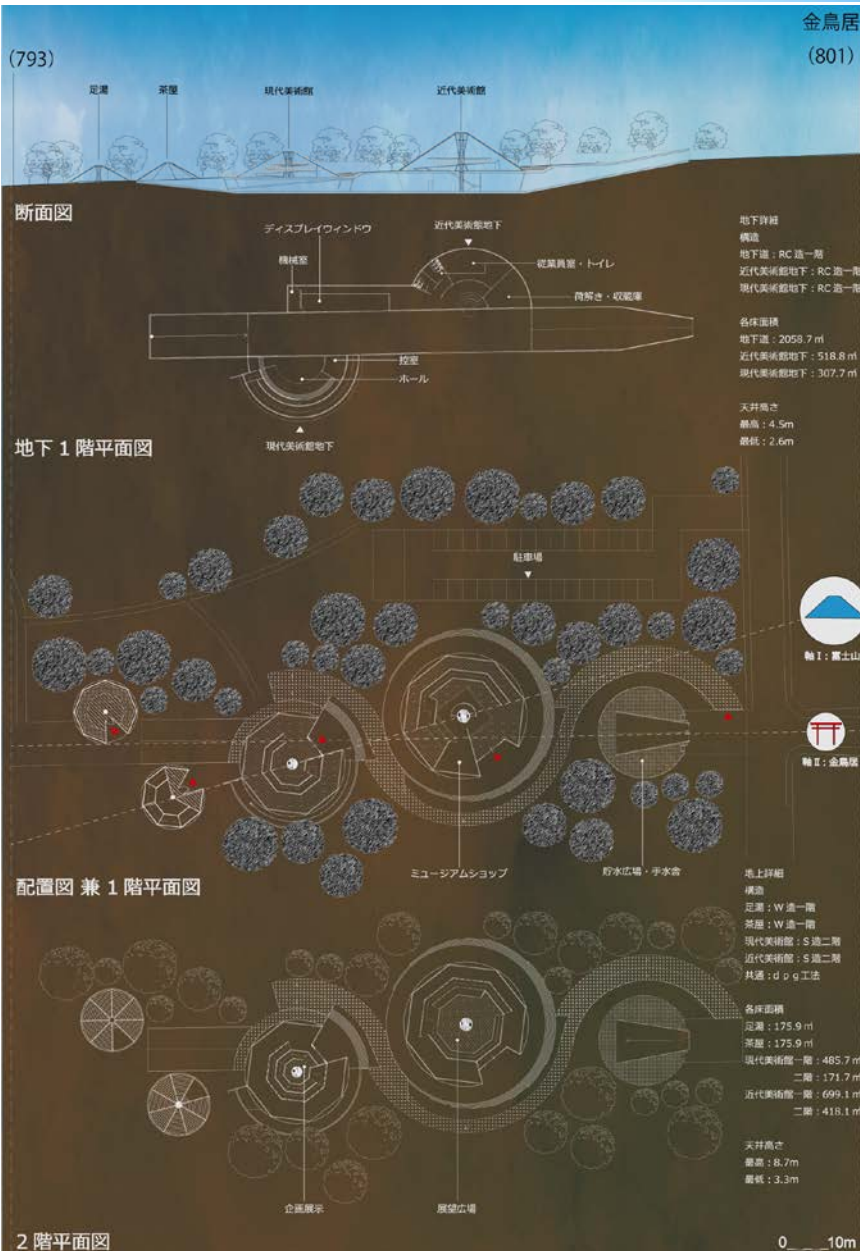
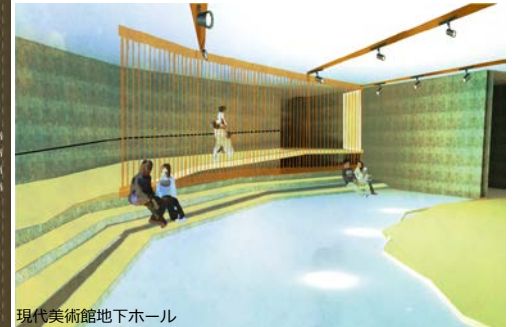
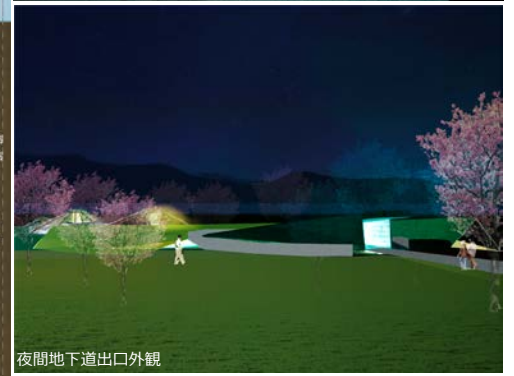
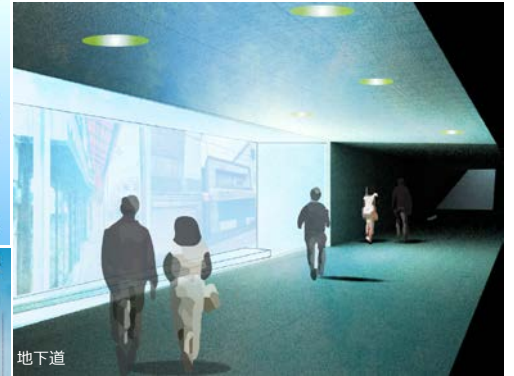
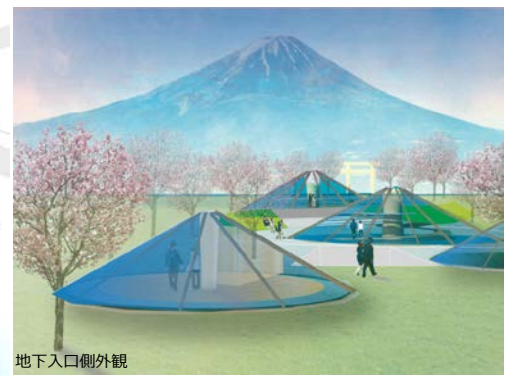


図2. 全体構成と詳細計画